

# 確かな音声言語能力に基づいて自らの考えを生き生きと表現できる生徒の育成 ～言語活動の「練り上げ」と「ミラクルシート」による継続的な指導を通して～

伊勢崎市立第三中学校  
教諭 池田 瑞輝

## 1 はじめに

平成25年度の県中国研の代表授業を行った際、読みを広げるための手立てとして提案させていただいたのが「ワールドカフェ」形式の話合いだった。以降、参観された先生方のご尽力により、伊勢崎市内の中学校では、国語科の授業だけでなく、道徳や学活の時間においても「ワールドカフェ」が広く活用されるようになり、生徒の思考を広げる手立てとして普及している。生徒一人一人の思考から始まり、小集団による思考、クラス全体での思考と、段階を追って生徒の思考を広げていった授業展開の中で、自分の考えたことを伝えようとするときの生徒一人一人の生き生きとした表情、それを驚きや共感をもって聞き入る生徒の真剣な表情を見て、一人の教師として大きな感動を覚えた。こうした生徒同士の生き生きとした対話の中にこそ、私の目指す学びがあると実感し、そこからのおよそ四年間に渡り様々な実践を積み重ねてきた。本稿は、そのうち、平成27年度に入学した生徒への二年半にわたる「話すこと・聞くこと」の指導実践をまとめたものである。

## 2 主題設定の理由

本県では国語科に関して、言語活動の中で、基礎的・基本的な知識や技能を適切に使うことに対する課題がある(はばたく群馬の指導プラン)とされている。特に音声言語に関しては、伝える場面や聞いて理解する場面、互いに意見を交わして考えを深める場面など、授業の根幹をなす場面でその能力の発現が強く求められている。

また、本校では昨年度まで、校内研修において「知識・技能を生かして自ら考え表現する生徒の育成」という主題のもと、「学び合い」を手立てとして研究を重ねてきた。その中で、私は研修主任や国語主任として校内研修をリードする立場を経験してきた。多くの実践に触れることで、「学び合い」によって生徒の生き生きとした姿が引き出せることは実感できた。しかし、「学び合い」の場面で消極的な姿を見せる生徒は少なからず存在し、授業展開の中で十分に自己の考えを表現できない生徒もいるのが現状である。

特に国語科に関しては、限りある授業時数の中で、表現活動が年間を通じて多く設定されていることもあり、「学び合い」として計画された交流活動が一度きりの発表会に偏る傾向がある。活動に消極的だった生徒も、発表会を終えると「ああすればよかった」「こうしておけば…」と反省の言葉を口にする様子が見られる。そして多くの場合、そのまま単元を終えてしまうことになる。しかし、この瞬間こそ、生徒の学習意欲が高まる場面ではないだろうか。この発表会の後に学習活動が展開されることで、生徒の思考力、判断力、表現力が高まるのではないだろうかと考えた。

そこで、一人一人の生徒が目的意識をもって取り組めるような学習環境を整えること、課題追究などの適切な場面で交流活動を設定することで、目の前で展開される授業に対して主体性を持ち、課題解決に生き生きと取り組めるようになるのではないかと考えた。このような工夫を積み重ねることで、確かな音声言語能力に基づいて自らの考えを生き生きと表現できる生徒の育成につながると考え、本主題を設定した。

### 3 実践のねらいと見通し

本実践における主な手立ては「練り上げ」と「ミラクルシート」である。

本実践では、思考力、判断力、表現力の育成に向けて、スピーチや話し合いなどの具体的な言語活動をもとにして、さらなる言語能力の高まりを意図した生徒同士の交流活動を「練り上げ」と呼ぶ。生徒の主体的な学びを引き出すには、生徒自ら課題を発見することが必要である。しかし、その一方で課題と一口に言っても、教師が意図するような気づきを生むには工夫が必要である。そこで、「練り上げ」は主に以下のような観点で学習を計画することとした。

- 1 課題把握場面は、生徒同士の相互評価に基づく活動であること。
- 2 相互評価には明確な評価規準が示されること。
- 3 単元の中で自身の変容を実感できるように比較可能な言語活動を設定すること。

また、単元ごとに学習計画や目指す言語能力を明示したワークシートを「ミラクルシート」と呼ぶ。「ミラクルシート」には以下に示す図1のような機能を持たせている。

5		4		3		2		1		予習1		予習2		予習3		予習4			
2/14		2/8		2/7		2/6		2/2		学習日									
★完成した作品を読み合い、学習の成果を実感する。 書き上げた物語を読み合せて、工夫した表現の効果を確かめる。		★ ★学習した表現の工夫を生かして思いの伝わる物語を書く。 第一時、第二時の学習を振り返り、心情や情景を読み手に伝わりやすくなるように表現を工夫する。		★ ★伝えたいことを明確にして、物語の構成をある日の出来事として、自身の日常体験の中から題材を探す。 テーマにふさわしい場面を選び、構成する。		★ ★モデル文をもとに効果的に表現の工夫を書き加えることができる。 モデルとなる文章に対して、どこに工夫された表現を入れると効果的か考える。 効果的な表現の工夫を書き加える。		★ ★モデル文に表現の工夫を書き加えることができる。 モデルとなる文章に指定された表現の工夫を書き加え、工夫の仕方の練習をする。		★ ★モデル文に表現の工夫を書き加えることができる。 モデルとなる文章に指定された表現の工夫を書き加え、工夫の仕方の練習をする。		めあて 学習内容予習内容		自己評価 A・B・C		目標に向けて身に付いたこと、考えたこと		組 番 氏 名	
○		③ A		③ A		③ A		③ B		A・B・C		A・B・C		A・B・C		A・B・C			
友達の作品は自分が思いの伝わりやすいような比喩を使ったり、行動描写があったりと、勉強になりました。自分も取り入れたいです。		比喩が頭にたくさん浮かんで工夫した表現に「できた」と思いますが。昨日より行動・情景描写が上手くなり、心情を表せたと感じています。		行動描写なども工夫したいです。		今までモデル文で練習してきたことを生かし、比喩を上手く使うことができました。行動描写なども工夫したいです。		例えられたと思いましたが、パッと頭に浮かばず難しい表現になってしまったり、表現に「た」や「さん」読み替わります。たのて本をたくさん読みたいです。		比喩を使って身近なことに例えられたと思いましたが、パッと頭に浮かばず難しい表現になってしまったり、表現に「た」や「さん」読み替わります。たのて本をたくさん読みたいです。		大きな音と小さな音を何にしたと比べればいいか、ことし難しかったです。分りやすくする工夫として、伝わりやすくしたいです。		目標に向けて身に付いたこと、考えたこと		A・B・C		A・B・C	

**ミラクルシート** 表現の仕方を工夫して書くこと 組 番 氏 名

単元の目標 より伝わる文章を書くために、これまで学習した表現の工夫を活かすことができる。

★身につけたい力 ※単元を通して身につけたい力を選び、□を赤で塗りましょう。

□①自分の思いを伝えるために、体験や経験をもとにした物語を書く力。

□②人物の心情が伝わるように、情景描写を用いて文章を書く力。

■③場面の様子や気持ちが伝わるように、比喩を効果的に用いて文章を書く力。

★選んだ理由を書きましよう。

★生かしたい既習事項

◎相手に分かりやすく伝わるように内容や構成、書き方を工夫する。(職場体験報告会)

◎伝える内容や相手に応じて情報を選択する。(生物が記録する科学)

◎気持ちが伝わるように表現や構成を工夫して書く。(気持ちを込めて手紙を書く)

★前に作文を書いた時に、比喩を用いると伝わりやすいことを学習したので、自分の伝えたいことをより分かりやすく伝えられるようにしたいからです。

目的をもって読書するはずなのに、

図1 ミラクルシートの表面

- ・単元の目標とおおまかな学習活動、各時間のめあてを明示している。
- ・身につけたい言語能力および、その単元で活用を促したい既習事項を単元ごとにそれぞれ3つ示している。
- ・身につけたい言語能力のうち、任意の一つを生徒が選ぶことで学習の焦点化を図っている。
- ・毎時間の自己評価と記述による振り返りを行うことで学びをメタ認知させている。

また、裏面には、身につけたい言語能力について単元の初めと終末で自身の変容を比較して書く「振り返り欄」、生かしたい既習事項と身につけたい言語能力の「自己評価欄」を設けている。

上記の手立てをもとに育てたい生徒像は「確かな音声言語能力に基づいて自らの考えを生き生きと表現できる生徒」である。

本実践における「確かな音声言語能力」とは、伝え合うための音声言語に関する基礎的な能力を指す。具体的には以下の通りである。

- ・相手意識や目的意識をもって伝える力。
- ・根拠を明確にして伝える力。
- ・自分の意見と比較しながら相手の意見を聞く力。
- ・相手の意見を明確に捉えるために質問する力。
- ・互いの意見をもとに考えを広げたり深めたりしようとする意欲。

また、「自らの考えを生き生きと表現できる」とは、自分の考えを伝えることに喜びを感じ、様々な表現の工夫を用いて相手に正確に伝えようとする姿のことである。

以上のことから本実践において設定した仮説は以下の通りである。

国語科の「話すこと・聞くこと」の指導場面において、学習過程に「練り上げ」の学習場面を取り入れること、目指す言語能力とその学習過程を明示した学習計画表「ミラクルシート」を活用することで、目指す言語能力に向けて自ら課題意識を持って学習に取り組み、確かな音声言語能力に基づいて自らの考えを生き生きと表現できる生徒が育成できるであろう。

#### 4 実践の内容

(1) 友達紹介スピーチをしよう(平成27年度一年生4月)「話すこと・聞くこと」

確かな音声言語能力を身につけさせるために、まずは一人一人の伝える力を育成することをねらう学習を計画した。中学一年生の四月に取り扱った単元「友達紹介スピーチをしよう」では、以下のような「練り上げ」による指導を試みた。

##### <言語活動>

友達に取材をして得た話題を四つのパートに構成し、クラスみんなに紹介するためのスピーチを行う。

##### <ミラクルシートで示した単元の目標および目指す言語能力>

単元の目標 話の構成を工夫し、見出しカードを活用してスピーチをする。

声の大きさや速さなどを考えて話す力。

わかりやすい話の構成をする力。

相手の話から聞きたいことや知りたいことなど考えながら聞く力。

##### <学習の流れ> □部分が「練り上げ」

単元の学習課題を把握する。

友達に取材し、聞き取ったことをまとまりに分けて整理する。

プレ発表会を行う。

**自己の課題の把握** プレ発表会の様子をビデオで視聴し、相互評価する。

**課題解決** 自身の課題を解決するための工夫を考えたり、練習したりする。

クラス全員の前で発表する。

##### <練り上げ場面の詳細>

音声言語はその場に残せないため、自己を客観視することが困難である。そのため、一人一人プレ発表している様子をビデオで撮影し、それを視聴することで気づきを促した。

また、この学習では一人でビデオを見るのではなく、六人組の班で視聴させたため、必然的に自身の考えだけでなく、周囲からの多くの助言をもとに自己の課題を把握する様子が見られた。

課題解決の場面では、自分以外の発表の様子をビデオで視聴することで気づいた良さを取り入れたり、視線を落としてしまう時間を縮めるために、メモする言葉をできるだけ短いものにしたりするなど、個々に工夫が見られた。

#### <生徒の振り返り(ミラクルシートより)>

「自分ではわからなかったけど、映像を見たら、最初の発表の時は下を向く時間が長いことに気づいた。友達からアドバイスをもらって練習を繰り返したので最後はうまくできました。」

「映像を見たら、声が小さくて聞きづらいという課題が見つかり、そこを意識して練習をしたら少しだけ良くなった。最後のスピーチは友達からもよくできていたよと言われてうれしかった。」

#### <考察>

ミラクルシートを用いて単元の学習を始めたことで、具体的にどのような力を身につければよいかを生徒が明確に意識できた。

また、再現性に乏しい音声言語は、映像メディアなどに保存しておくことで学習を深めることに役立つことがわかった。また、優れたスピーチをするような生徒であっても、自分自身のスピーチについて客観的に理解することは困難であり、その良さや課題については、ビデオなどを視聴して初めて気づくものだということもわかった。音声言語の指導においては、自分自身の姿を正確に捉えさせるための工夫が欠かせないこと、そのために相互評価が機能を果たすことがわかった。

### (2) ブックトークをしよう(平成27年度一年生7月)「話すこと・聞くこと」

先述の「友達紹介スピーチ」から少し間を置いて、「お気に入りの本を紹介するスピーチ」(以下、ブックトークとする)の学習を行った。ここでは、単純に紹介するということから一歩進めて、「紹介した本が読みたくなるようにする」という目的意識を持たせること、伝えようとすることに根拠を含めること、話の構成を工夫することをねらいとして学習を計画した。また、単元の導入場面において以前のスピーチを振り返らせることで、二つの単元を結びつけた「練り上げ」を意図した学習を計画した。そこで、「ブックトークをしよう」では以下のような「練り上げ」による指導を試みた。

#### <言語活動>

聞いている友達が読んでみたくなるように、お気に入りの本を一冊取り上げ、いくつかの観点をもとにその本の良さを紹介するブックトークを行う。

#### <ミラクルシートで示した単元の目標および目指す言語能力>

単元の目標 一学期に身につけた力を発揮して、お気に入りの本を紹介する。

声の大きさや速さなどを考えて話す力。

伝える相手や目的を意識して情報を集め、整理する力。

観点をもとに、根拠を明らかにしてわかりやすい話の構成をする力。

#### <学習の流れ> 部分が「練り上げ」

自己の課題の把握	以前に行ったスピーチの映像を見て自身の課題を把握する。
----------	-----------------------------

お気に入りの本についてブックトークで紹介したいところを書き出す。  
 観点ごとに内容を整理して400字程度の原稿を書く。  
 原稿をもとにして、話の内容を思い出せる程度のキーワードをメモ用紙に書き出す。

課題解決	メモをもとにスピーチ練習をする。
自己の課題の把握	小グループでの発表会を行い、相互評価する。
課題解決	相互評価で気づいた自身の課題を解決する。

クラス全体でブックトーク大会を行う。

<練り上げ場面の詳細>

四月のスピーチの学習課題が十分に解決できなかった生徒を想定し、単元全体の導入に当たる の段階で以前のスピーチ映像を見せた。

また、 の段階では、ビデオ撮影は行わず、四人組の班を作り、その中で発表させた。自分の姿を映像で確認することはできない活動だったが、話しぶりよりも、構成や内容に視点を当てて相互評価をさせた。その中で活用したのが以下の表に示したループリックである。

	話し方	根拠	構成
A	内容のまとまりで間を取ったり、声の大きさやスピードに変化をつけるなど、聞いている人を見ながら工夫して話している。	本の内容から取り上げた例と、その本の良さを結びつけて納得できるように話している。	中心となる話題とそれ以外の話題の時間配分を工夫したり、話題のつながりを意識したりしながら話している。
B	聞き取りやすいように声の大きさやスピードを工夫して話している。	本の内容の中から、具体的なことを例として取り上げてそれを根拠として話している。	まず、次になどの接続語を使いながら、話題のつながりを意識して話している。

の段階では、相互評価で組んだ班を生かして、聞き合いながら修正する形で学習を進めた。何度も声に出すことで、声による伝わり方のイメージや伝わりやすさなどについて実感を伴って考える様子が見られた。

<考察>

「話すこと・聞くこと」については一つの単元に多くの時数を割けない実情がある。こうした場合、導入段階で、それ以前の学習で気づいた自身の課題に向き合わせるなど、新たな単元との結びつきを明確にすることで、短い学習計画でも学びに深まりが生まれることがわかった。また、ループリックを示すことで、評価する生徒にとっては規準が明確になるため、努力を要するところを指摘しやすくなり、評価される生徒にとっては、明確な目標として目指す姿をイメージできるため、意欲的に取り組む姿勢を引き出すことができた。

(3) パネルディスカッションをしよう(平成28年度二年生10月)「話すこと・聞くこと」「読むこと」

音声言語の指導の中には、スピーチや自己紹介のような個人で完結できる活動だけでなく、生徒相互に音声言語を介してやり取りを行う話し合い活動も当然含まれている。話し合いに関しては、一年時において、司会の進め方、パスセッションの効果的な進め方などを「練り上げ」によって習得させている。ここでは、そうした学習を経験した生徒の二年時の実践「パネルディスカッションをしよう」を振り返る。

パネルディスカッションとは、大きな集団で思考を深めたり、広げたりするのに有効な

話し合いの手法である。意見や立場を変えたパネリストと呼ばれる代表者が数名選出され、主に話し合いを展開する。話し合いの後半には、フロアと呼ばれる聴衆がパネリストに質問をすることで話し合いに参加し、意見交換をすることになる。

国語科の授業では、少人数で話合うだけでなく、クラス全体で話合う場面も多い。パネルディスカッションを通じて、立場の違いを踏まえた意見交流のあり方について考えさせることで、生き生きと自分の考えを表現する姿に近づけることを意図して「練り上げ」を生かした単元を以下のように構想した。

#### <言語活動>

互いの考えを深めたり広げたりするために、相手を尊重しながらパネルディスカッションをする。

#### <ミラクルシートで示した単元の目標および目指す言語能力>

単元の目標 互いの発言を比較、検討しながら自分の考えを広げるような、意義のあるパネルディスカッションができる。

自分の考えをまとめるために、異なる立場や考えを想定する力。

自分の考えと比較しながら相手の話を聞く力。

互いの発言を検討し、自分の考えを広げていく力。

#### <学習の流れ> 部分が「練り上げ」

一年前に行ったバズセッションの録音を聞いて学習課題を設定する。

テーマについて自分の立場と根拠を考える。

「プレ・パネルディスカッション」を行い、互いの意見の整理をする。

クラスの半分の生徒でパネルディスカッションを行い、課題を見つける。

残り半分の生徒で前時の課題を意識しながらパネルディスカッションを行う。

「書くこと」「読むこと」など、いくつかの単元を挟む。

「走れメロス」を読み深めるために、作品の主題についてパネルディスカッションを行う。

#### <練り上げ場面の詳細>

単元の導入時点で学習課題をつかませるために使ったのはちょうど一年前、一年生で学習した「バズセッション」の最後の話し合い場面の録音である。クラス替えをしているため、聞くことができるのは必ずしも自分の参加する話し合いの音声ではない。しかし、意見の述べ方、質問の仕方、結論に至るまでの話し合いの展開の仕方などに視点を当てることで、学年として共有すべき課題を見つけることはできると考えた。

この単元での「練り上げ」の中心は学習の流れの と である。パネルディスカッションを通常行う場合、クラス全員で話合うが、ここではクラスの半分を話し合いに参加する生徒、残りの半分を話し合いの様子を観察して課題を見つける生徒というように役割分担をさせた。この役割分担によって、話し合いの内容そのものではなく、話し合いに深まりを生むための意見の述べ方や、他者を尊重した反論の述べ方などの「話すこと・聞くこと」の本質的な学びが生まれると考えた。

課題解決場面は である。ここでは前時とは違う生徒たちによる話し合いではあるが、解決しようとする課題は の学習場面で共有しているため、話合う生徒も、それを聞いて評価する生徒も同じ目標をもって学習に参加できた。

の学習場面は、別単元の「走れメロス」の学習の一部として実践した。「話すこと・聞くこと」の指導事項は、「読むこと」など他領域において活用されることで実践的な言語能力に高められるものと考えたからである。「走れメロス」の主題は視点の当て方により様々な解釈が可能である。本実践では、人物の描き方や情景描写などの表現の工

夫を軸に読み進め、そこから読者にどのようなことが伝わるかを考えさせた。そこで読み取った主題をさらに読み深めるためにパネルディスカッションを活用した。

<生徒の振り返り(ミラクルシートより)>

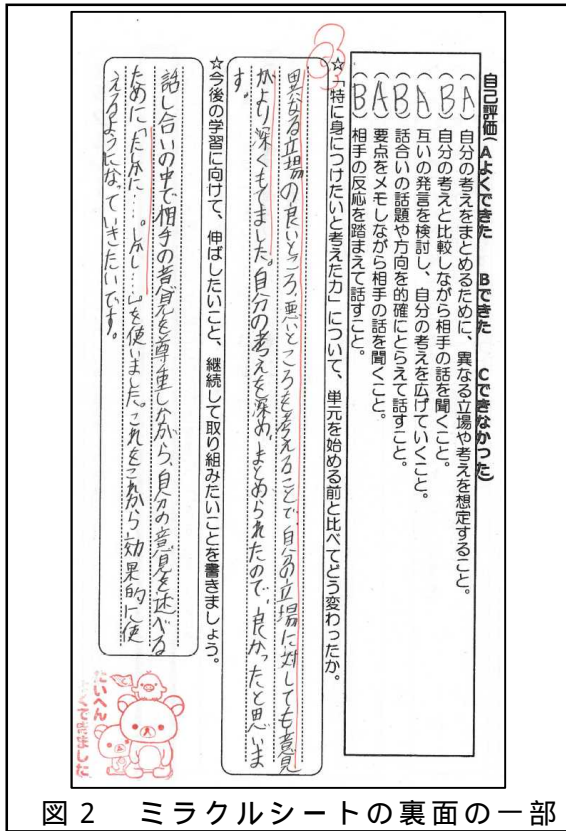


図2 ミラクルシートの裏面の一部

「話し合いの中で相手の意見を尊重しながら、自分の意見を述べるために『たしかに...。しかし...。』を使いました。これをこれから効果的に使えるようになりたいです。」(パネルディスカッションをしよう)

「作者の意図を、パネルディスカッションを通してつかむことができました。また、パネリストとして参加したことで、自分の読みの甘さや根拠のあいまいさにも気づきました。真剣に意見を交わすことができてよかったです。」(走れメロス)

<考察>

話し合いを相互評価するという活動自体、あまり例のない学習である。しかし、「練り上げ」のために相互評価を取り入れたことにより、生徒の振り返りにあるように、反論の仕方として、一度相手の意見を受け入れるような表現を使ってから本当に言いたいことを話すようにすると建設的な話し合いになるなど、こちらが意図した成果が見られた。

5 検証

これまでの指導の成果を検証するために、中学三年生の物語教材「故郷」を読み深める学習に対して生徒がどのように互いの考えを交わし合うか、その姿を確かめた。

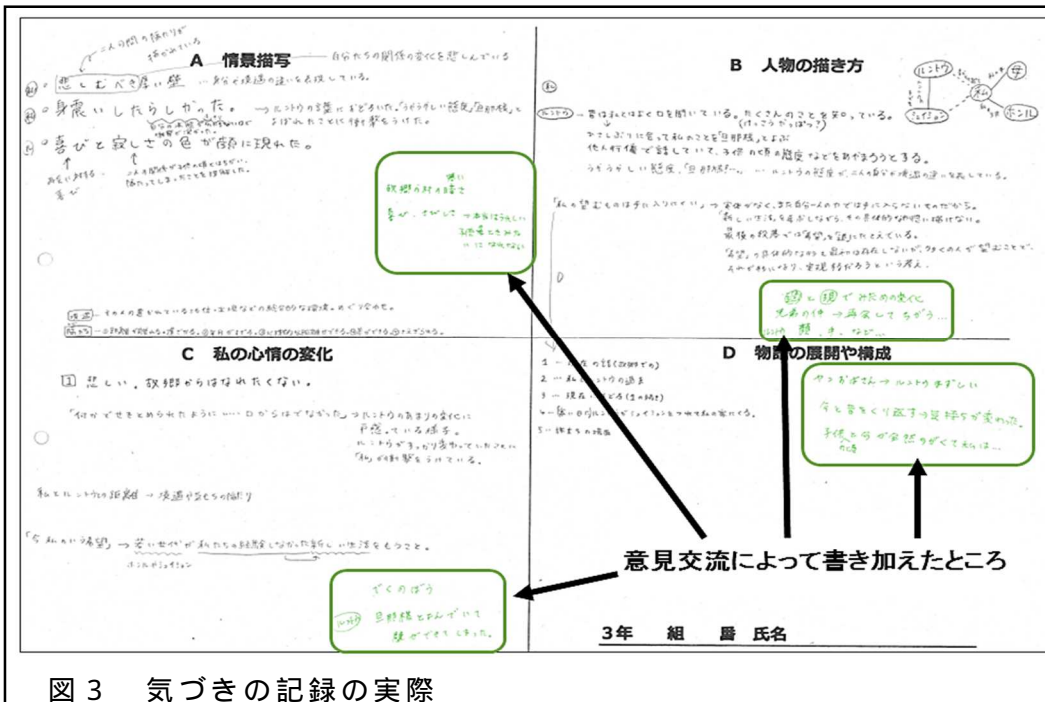


図3 気づきの記録の実際

この単元では、授業を進めていく中で、作品の表現の工夫について自分なりに感じ取ったことを「気づきの記録」としてメモ書きを積み重ねていった。そして、単元の最終末においてそれぞれの「気づきの記録」をもとに交流をし、作品にとって最も効果的な表現の工夫は何かを一人一人が評価するという学習を計画した。

単元に置ける検証場面は、その「気づきの記録」をもとにして、作品の主題である「人と人との関係」について深く考えさせるために最も効果的だと思われる表現の工夫は何かを話し合わせる場所とした。

図3は生徒の書いた実際の「気づきの記録」である。鉛筆書きはワークシートの持ち主が書いたメモで、ペン書きしているのは、他者との交流を受けて、納得したことを書き足したものである。この記録を書いた生徒自身、多くの気づきが生まれていることは素晴らしいが、そうした中でも相手の意見を聞いて納得し、受け入れている部分が多いということである。70名の生徒のうち、他者の意見を書きこまない生徒はいなかった。

物語の主題と結びつく最も効果的な表現の工夫は何かというテーマで行った四人組による話し合いは以下のように展開していた。

生徒A「まずは一人ずつこれだと思う工夫を挙げていこうよ。」

生徒B「一分だけ待ってもらっていいかな。」

生徒A「準備できたらB君から時計回りに言っていこう。」

～一分後～

生徒B「僕は人物の描き方だと思うよ。特にルントウの変わりぶりが効果的だと思う。」

生徒C「私は情景描写。故郷の描写の変化が一番効果的かな。」

生徒A「僕も情景描写かな。何度か繰り返している風景の描写が印象に残っている。」

生徒D「私は展開や構成です。」

生徒A「じゃあ、人物の描き方から理由を言っていこう。」

生徒B「ルントウの『旦那様』という言葉が『身震いしたらしかった』と受け止めた私のショックの大きさがこの作品で一番印象的なんだよね。第二場面のルントウとの落差が大きくて、ここで人と人との関わりを考えさせようとしているんじゃないかな。」

生徒C「私は情景描写なんだけど…。ルントウが消えてしまった後に出て来る美しい故郷の描写は、前の授業を受けるまでは意味がわからなかった。だけど、新しい世代への希望と考えると、過去を振り払って未来に向かうみたいなの…魯迅の考え方が一番出ているように思う。ここはじっくり考えないと意味が分からないところだからこそ、ここが一番の工夫かなと思う。」

～中略～

生徒B「情景描写の二人に質問なんだけど、この作品は私とルントウの二人が重要だよ。最後の故郷の風景は、ルントウは関係ないと思うけど、どうなのかな。」

生徒A「確かに二人のことが中心だけど、この話はホンルとシュイジョンに託すところがあるから意味があるのかもね。最後の風景はそこを指しているんだよ。」

～中略～

生徒D「みんなの意見を聞いていたら、どれもそうだなって…。特に故郷の描写が何度も出てくるのは、一学期にやった『握手』と同じかもって…。あれも握手を何度もして、その違いから何か考えるみたいな授業したよね。」

生徒A「そうそう。繰り返す表現って印象に残るし、大きな工夫だよ。」



話し合いの様子からわかったことは以下の通りである。

- ・終始リラックスした表情で、相槌を打ったり、笑顔で賛同したりしながら伝え合っていたこと。(自らの考えを生き生きと表現する姿)
- ・特に示したわけではないが、まず意見を一人ずつ、次に根拠を一人ずつというように話し合いにルールが見られたこと。(根拠を明確にして伝える力)
- ・誰かが根拠を述べる時にメモを取りながら聞く生徒がいたこと。(自分の意見と比較しながら相手の意見を聞く力)
- ・他の人の意見を尊重したうえで自分の意見を述べる努力をしていたこと。(相手意識や目的意識をもって伝える力、互いの意見をもとに考えを広げたり深めたりしようとする意欲)
- ・他の人の意見に対して質問が出されたこと。(相手の意見を明確に捉えるために質問する力)
- ・リーダー役の生徒が話し合いの方向性を意識して進行していたこと。(互いの意見をもとに考えを広げたり深めたりしようとする意欲)

班によっては話し合いが停滞する時間の生まれる場面もあったが、音声言語の指導によって培った言語能力が十分に発揮されていたと言える。

## 5 成果と課題

### < 成果 >

#### (1) 全国学力学習状況調査から

本実践の対象となる学年の全国学力学習状況調査の国語の正答数の分布を見ると、A問題、B問題ともに全問正解の割合が非常に高く、特にB問題に関しては、全問正解者の割合が全体のおよそ1/4程度と、他の正答数と比べて最も高く、活用力の高い生徒が多いことがわかる。

A問題については、問題番号②-二、③-二のように、文章構成や表現の工夫に関わる問題は県や全国平均を明らかに上回っている。これは、本実践で示したように、具体的な言語活動において、仕上げの前に相互評価を用いて、それぞれの成果物を練り上げる学習を一年時から継続してきたことの成果と考える。

B問題の問題番号②-三では、根拠に基づいて意見を書く出題がなされたが、解答類型を見ると、「根拠を含めずに書いたために誤答」となった割合が全国や県と比較して低い結果となった。これは、これまでの授業の中で根拠をもって考えたり、発言したりすることを音声言語の指導に位置付けて徹底してきた成果であると考えられる。

#### (2) 生徒の振り返りの記述から

「『故郷』の中にはたくさんの仕掛けがあり、授業で深く読んでいくのがおもしろかった。読む度に発見がありすごいと思った。」

「話し合いの中で自分が全く気づいていなかったことに気づかされた。まだまだこの作品には工夫が仕掛けられているような気がして何度も読みたくなりました。」

「自分一人では思いつくことができなかつた考え方、気づくことができなかつた表現をクラスの皆が意見として出していくことで、いろいろな視点から考えることができ楽しかった。」

生徒の振り返りは上記のように、伝え合う活動によって思考が深まることに対して楽しさや喜びを実感するものがあった。また、自分の発言によって班の意見がまとまったことに対して嬉しさをにじませる感想も見られた。

以上のことから、本実践によって、「確かな音声言語能力に基づいて自らの考えを生き生きと表現できる生徒」の育成に一定の成果があったと考える。

#### < 課題 >

表現活動そのものへの抵抗感をもつ生徒は一定数存在し、特に音声言語の場合はそれが少なくないのが実情である。その一方で学習を繰り返していくうちに表現することが好きになっていく生徒もいるため、学年が上がるごとに両者の乖離が大きくなっていき、意欲の面でも言語能力の面でも差が広がっていきやすいところに大きな課題がある。

比較的簡単な課題であれば楽しんで取り組めるものの、根拠を伴う表現になると苦手意識から意欲が低下してしまう傾向もある。

今後は、例えば近年盛り上がりを見せているビブリオバトルのように競い合いの中で熱中し、心の底から学ぶことを楽しむというような言語活動を設定し、その中で一人でも多くの生徒が学ぶ楽しさを実感しながら言語能力を高めていける学習を提供できるように教材研究をさらに深めていきたい。

#### < 参考文献 >

- ・中学校国語科アクティブ・ラーニングガイドブック 富山哲也著 明治図書
- ・「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案 西岡加名恵・田中耕治 編著 学事出版
- ・【中学校版】言語活動の充実に関する指導事例集 文部科学省編